アシテジ

ASSITEJ Japan Center

No. 101（2008. 4）

国際児童青少年演劇協会
日本センター
＜略称・アシテジ＞

〒102-0085
東京都千代田区六番町13-4
浅松ビル２Ａ
ＴＥＬ 03（5212）4773
ＦＡＸ 03（5212）4772
Mail: centre@assitej-japan.jp
Web: http://www.assitej-japan.jp/

発行者　アシテジ日本センター

第16回アシテジ世界大会

●オーストラリア・アデレイド市

●二〇〇八年5月9日～18日

3年に1回開催されるアシテジの世界大会、第16回世界大会は、5月9日～18日、オーストラリアのアデレイド市で開催される。

日本からは、内木文英会長を団長に約50人が参加する。

世界大会は大きく分けて、二つの部門、〈会議等〉と〈フェスティバル〉に分けられる。

〈会議等〉

ほとんどが選挙に費やされる。

・次回世界大会（2011年）には、リンツ市（オーストリア）、カイロ市（エジプト）、コペンハーゲン市（デンマーク）・マルメ市（スウェーデン）、ロンドン市（イギリス）が立候補。

・事務局長には、イビカ・シミック氏（クロアチア）と、ポール・ハーマン氏（イギリス）が立候補。二人とも来日経験あり。

・世界理事には18人が立候補。国名だけ挙げておく。アルゼンチン／オーストラリア／オーストリア／カメルーン／デンマーク／エジプト／フィンランド／ドイツ／イスラエル／ヨルダン／韓国／メキシコ／ルワンダ／南アフリカ／スワジー／イギリス／アメリカ／ジンバブエ。

日本からの立候補は、今期、見送ることになった。

〈フェスティバル〉

作品は、28作品。オーストラリアが15作品、オーストリア・スウェーデン・イスラエル・デンマーク・韓国・マレーシア・アメリカ・ドイツ・ニュージーランド・タイから各1作品。

合同公演として、オーストラリアと南アフリカ、韓国とイギリスとの2作品。

日本から、沖縄のキジムナー歌舞団の『**道ぬ空**』が出演する。

注目したいのは、韓国とイギリスの合同作品『橋』。韓国の高順徳さんの作、南仁佑さんの演出でかなり前評判が高い。二人とも、文化庁の「海外芸術家招聘研修」で3ヶ月間にわたり日本の児童青少年演劇を研修した経験がある。

○

今回の世界大会は、大きな〝節目〟となる世界大会でもある。

一九九〇年以来、延べ18年にわたり世界事務局を受けてきたスウェーデンが、スカンジナビア諸国からの助成金が打ち切られることで、事務局長を降りざるを得なくなった。最も大きな問題は、そのために派生する財政問題である。

イギリスとクロアチアが立候補しているが、財政問題は未知のままである。今後の大きな課題といえる。

次回の世界大会に4会場が立候補してきた。今まで3会場の例があるが、4会場の例がない。

各国にとっては、世界大会を開くことで、国から大きな助成金を受けることができる。そのあたりが全く日本と違うところ。

次回の会場をどこにするか。事務局問題もからみ難しい。

どうしても言っておきたいこと。今回の参加料（登録料）が高すぎる。世界各国がかなり怒っていると聞くが、あたりまえだろう。強く抗議したい。次回の開催地を決めるにあたり、参加料については十分に参考にする必要があるだろう。

（石坂慎二）

◀キジムナー歌舞団『道ぬ空』

◀韓国・英国合同『橋』

アシテジ日本センター〈第27回定期総会〉のお知らせ

◆期日　二〇〇八年6月1日(日)　午後1時30分～

◆会場　国立オリンピック記念青少年総合センター センター棟　三〇四室

風の子関西 イギリス公演

大坪歳枝（風の子）

今回、風の子関西に同行し、ロンドンに行って来ました。作品は『ハローまるちゃん』。これは演出家ピーターウイルソン氏（人形劇が専門）の演出です。3月8日、関空から13時間の飛行機でした。迎えの車に乗り、招聘してくれたユニコーン劇場へ。道々バッキンガム宮殿の前を走ってくれたりしたんですが、ただ、ただ、時差ボケと言いますか、睡魔と闘っていました。劇場に荷物をおろし、今度は地下鉄で大きな私物を持ちながら21日間生活をするエンズリーコートへ。不便なこともいろいろありました。部屋のスチームが壊れていたり、お風呂のお湯は一向に熱くならない、シャワーの口がない等、ま、〝郷に入っては郷に従え〟です。

10日仕込み、9～10時までかかりました。スタッフの人達、文句一つ言わず本当によく協力してくれました。100名位のキャパで子ども達に見やすい傾斜になっています。このユニコーン劇場はロンドンで初めての児童演劇専門の劇場です。今年オープン三年目だそうです。そして3Fには330席のメイン劇場があります。半円形のここも見やすい傾斜になっていました。両方の劇場で年間600ステージ公演するそうです。年4本制作するそうですが2本をトニーグラハムさん、2本を昨年からこのシアターに参加している、女性の副芸術監督のローザさんが演出するそうです。年4本の制作にびっくりしましたが国の援助と多くのスポンサーで運営しているそうです。ユニコーンの三つの仕事として、①自分の所の作品を作る。②国内でいい作品があればやる。③海外のいい作品があればやる。

イギリスの児童演劇の状況も聞きました。低調な時期もあったが、今は活発になっている。政府も児童演劇が大事だと外に向けて発信し始めた。そして学校の演劇の捉え方が国語教育の一環として捉えている。いろいろなチームがあり、教育チームが先頭になってワークショップ等を考えている。

ここの芸術監督であるトニーさんは2004年「国際交流児童青少年演劇フェスティバルTOKYO」にイギリス代表として出席、そこで風の子のハローまるちゃんと出会いました。そして今回の招聘になった訳です。『ハローまるちゃん』はオーストラリアと日本の合同制作です。木と紙の世界。対象年齢は4才以上。すべて真っ白な世界にマルちゃんが生まれ、いろいろな出会いをし、鳥が舞い、嵐あり、洪水あり、巨大なカメに会い、自分の悪戯で火事が起き、等々。三人の役者の無言劇です。

観客は学校動員の子ども達がほとんどですが、イースター以後は学校が休みになるので親子連れが多く来てくれました。日本人も多く、ブラウン首相夫人セーラさんも子ども二名を連れて来てくれました。気さくな方でした。2才、3才児も入っていました。が、よく見ていました。本当に集中していました。学校動員では6、7才でしたが、内容が解る分、火事が怖くて思わず声を出す子がいたり、親子連れは親が子どもにいろいろ説明してる姿、幼児が一生懸命見ている姿に嬉しそうな母親、日々、素敵な出会いがありました。最初の頃は班員は少し緊張していたと思いますが、後半はリラックスしたのかとても質の高い舞台になりました。ユニコーンの人達は次から次と見に来ては、今までユニコーンでやった作品の中で一番素晴らしいとか、来てくれて本当にありがとう。とか、賛辞の言葉をいただきました。

21日間26ステージ、集客人数は約2000名強でした。毎日降ったり止んだりの雨続き、雪の日もありましたが、全員元気に4月1日帰ってきました。ユニコーンシアターが出来て60周年記念、OHA!JAPANに参加する事が出来、風の子にとっても我々にとっても収穫でした。

▶ユニコーン劇場、終演後のロビー

◀劇団員と子どもたち

【編集委員】石坂慎二、上保節子、菊田朋義、林　陽一、ふじたあさや

アシテジ世界大会のもろもろ
〈機関紙一〇〇号に寄せて〉

菊田朋義（キオ）

実味を帯びたものになってきた。

互いの芝居を見合い交流し、作品の質を高めながら、両国の市民、とりわけ子どもたちが、生の舞台から生きる喜び、他者を理解し思いやる気持ちを掴んでいく、そんな機会をどんどんつくっていきたいと思う。

日本で初の子ども劇場を生み出した福岡や、県内に次々と新しい子ども劇場を増やし続けている鹿児島、その他の都市でも児童青少年演劇の国際交流を求める気運が熟しつつある。

機関紙「アシテジ」一〇〇号を読みながら、落合聰三郎先生・栗原一登先生・岡田陽先生・土方与平さん・香川良成さん他多くの先達の方々から、世界に眼を広げる意味を教えられた喜びと幸福を感じる。同時に今後、まだやるべきことを数多く残していることを痛感する。アジアを含め世界中の子どもたちが、平和な社会で飢えや病気や虐待から開放され、健康で豊かで文化的環境に恵まれ、楽しく生きていくために、児童青少年演劇に携わる、私たちの責任と役割を深く考えていきたい。

始めてアシテジ世界大会に参加したのは、1981年の、フランス・リヨンで開かれた時からであった。

日本センターを結成してはじめての参加であった。

その頃は、むすび座の代表であった丹下進さんが、大きなビデオカメラをぶら下げ、それだけでは駄目なので、一人では持てないほどのばかでかいバッテリーを変わる変わるぶら下げ、舞台を撮りまくっていた。しかも帰国の際には日本の税関でフイルムを預かられたというおまけ付きであった。

児童演劇界も、豪華さを競っていたようで、しかも自国の枠をはみ出そうとしており、アメリカの『眠れる森の美女』は、まるで日本の能・歌舞伎のような作りで、蜘蛛の糸を投げたりするといった風で、又、フランスのリヨンの『猫のダンス』は日本の水俣病を取り上げ、病にかかった少女の苦しむさまがまるで猫のダンスのようで…といった具合であった。（この芝居は興味深かった。）

それ以来、いろんな国の世界大会に参加した。

キューバ

キューバでの第11回の大会のときは、（旧ソ連と別れたときらしく）芝居を観にいっても、夜は街灯もなく真の闇で、暗黒のなかを会場の前で佇んでいたりした。聞くところによると、食べ物は配給で一日にコッペパン二個とか、ガソリンスタンドも開店休業、それでも外国人である我々には、リゾートホテルで、一応食べ放題、野ばらの石川さんなどは朝食のパンをくるんで部屋に持ちかえり、枕銭の代わりにおいていた。

大会の議場では、現地が世話をしてくれた通訳が、「皆さんこんにちは…」と言ったあと、後は無音…。わざわざ日本から持っていった、あのイヤホンの束は、何だったのだろう。土方与平さんが世界理事にトップ当選したことも後で聞かされた。

おまけに、リコンファームに無言の通訳さんが行ってくれたのだが、五人分がどうしてもとれないとかで、一人だけ袖の下を渡して何とかしてもらったが、満員の飛行機には四席きっちり空いていた。

ロストフ

第12回の世界大会は、ロシアのロストフ・オン・ドンで開かれた。日本からモスクワまで国際便で、そこで国内便に乗り換えたのだが、それが何と、床も鉄板がはみ出ており、そのうえ穴も空いているといった有り様。天井に頭がくっつきそうな太った叔母さんの客席乗務員が、どんと食べ物を置いていくといった具合…。それでも南へ1000キロの旅は無事だった。

この頃では、もう毎回のことになっていて、人気のあるアジア・デー（この時は日本だけだったかな…）は、誰かさんが焼き鳥をしようと、日本から串を大量に買い込んで、ところが調理場がそんな風になっていなくて、結局天麩羅に変更。串が余るからと、天麩羅に串を差して提供した。鹿児島子ども劇場協議会の藤英子さんが孤軍奮闘していた姿が今でも目に浮かぶ。

驚いたことには、これまで世界の会長もしてきたロシアのシャピロさんが、理事選挙で落選したことだ。こともあろうにロシアでだ。もっとも、それまで日本の存在を高めてくれた土方与平さんに変わって立候補した香川良成さんが英語でスピーチし、上位当選をはたしたことは大いに喜んでいいのだが…。

トロムソ

第13回世界大会は、北欧の町、ノルウェーのトロムソであった。さすがに日本からは遠く、長時間の禁煙の飛行機には参った。コペンハーゲンで一泊し、オスロ経由でトロムソへいくのだが、預けた荷物はそのままトロムソ迄届くということだったのに、風の子九州の林さんが、「我々の荷物が回ってるで…」と。さあ大変。乗り継ぎの便まで時間がないわ、大慌てで荷物をとり、また預けなおして、それでもなんとか間に合った。

トロムソはいい所だった。しかも、北欧の芝居は粒揃いで、観客数も少なく、あのリヨンでの豪華さとは比べ物にならない。助成金が出ないからと大人数に見せている日本も考えなければならないと思った。

第14回は韓国ソウルでの世界大会であるが、これは余りにも大勢日本から参加したので割愛する。

それぞれの世界大会の報告は、機関紙アシテジで詳細に報告されているので、心に残っている諸々を綴らせていただき、アシテジ100号の発刊に寄せてに変えさせていただく。

開

テルアビブ世界理事会報告

小林由利子（世界副会長）

平成20年1月29日～2月4日にイスラエルのテルアビブで世界理事会が開催された。地中海気候の温暖な気候を連想していたので、連日の豪雨と雷には本当に驚かされた。

以前から懸案事項だった次期事務局長に関して、クロアチアのイビカ・シミック氏とUKのポール・ハーマン氏が、両者とも助成金の目途がついたので立候補を表明している。また、世界大会候補地として、コペンハーゲン／マルメ（デンマーク／スウェーデン）、リンツ（オーストラリア）、ロンドン（UK）、カイロ（エジプト）が立候補を表明している。名誉会長と名誉世界理事の推薦があり、満場一致で同意され、世界大会で決議が行われる予定である。

2008年5月9～18日のアデレードのアシテジ世界大会（12・13・16・17日）及び児童青少年舞台芸術フェスティバルの詳細は、随時WWW.assitej2008.com.auに掲載されている。参加登録と鑑賞作品の選択を早期にするように要請があった。15日のアシテジ・フォーラムの分科会は、「社会改革の道具としての演劇」、「幼児のための演劇」、「文化的多様性のための演劇」、「次世代」、「演劇と子どもの文化環境」である。9日に共催される国際児童青少年演劇リサーチ・ネットワーク研究大会の基調講演（スーザン・オースチン氏／スウェーデン）とスケジュール等の説明があった。日本センターの理事会の要請を受けて、オーストラリア・センターに高額な参加費と作品選択の偏り（オーストラリアの作品が多い）について意見を述べた。

▶イスラエルの「児童青少年演劇の母」と共に

◀テルアビブ郊外の文化センター

言語問題がらみで問題を抱えているセンター（カナダ、オランダ、ベルギー）について審議され、継続してかかわり保持していくことが確認された。

各地域ネットワーク（アジア・オセアニア、北欧、南欧、中欧、アフリカ、中東、ラテン・アメリカ）についての報告があった。

今後のアシテジ・インターナショナルの活動のための募金である「アシテジ・フレンズ」への参加の要請があった。メンバーは3種類あり、金（終身会員・500ドル）、銀（3年間、250ドル）、銅（1年、100ドル）である。会員になると、アシテジ・インターナショナルに関する情報、年刊誌、アシテジ・インターナショナルのホームページ上で名前と国名の掲載、世界大会でのアシテジ・フレンド・イベントへの招待、特製バッジが提供される。今まで事務局があったスウェーデン政府からの助成金が今年度で打ち切られるので、多数の参加が望まれている。

最後にオーストラリアのトニー・マック氏から、世界大会への日本からの多数の参加者を期待しているというメッセージがあった。

オーストラリア・アデレードフェスティバル公演作品

オーストラリアのアデレードで5月9日から18日にかけて上演される作品は次の通りである。

海外作品

スウェーデン「ハラハラ」、韓国「カムンジャンの赤ん坊」、アメリカ「レッドロード」、日本「道ぬ空」、韓国・イギリス「橋」、ニュージーランド「月」、マレーシア「ユニゾン・カオス」、デンマーク「さよなら、ミスターマーフィン」、ドイツ「ロビンソン・クルーソー」、イスラエル「Ach Ach Boom Trach」、タイ「死ぬと言わないで」、オーストラリア・南アフリカ「オーストラリア対南アフリカ」

国内作品

オーストラリア「キャット」、「ヘッドロック」、「綿毛」、「ギルガメッシュ」、「ヘッドハンター」、「ナイナイのピクニック」、「ごろつき」、「オオカミに叫ぶ少女」、「チーズボーイの悲劇」、「イェラの格好をしたシンデレラ」、「鉄の男たち」、「ミスターマッギーとかみつきのみ」、「ジャンクヤードシンフォニー」、「夜間外出禁止令」。

アシテジ日本センターの歴史を振り返る②

前史Ⅱ（日本センター設立以前の国際交流）

石坂慎三（アシテジ日本センター事務局長）

私は前号〈連載〉①の最後に「この『設立準備会』の設立に至るまでの経緯等、次号で紹介する」と書いた。しかし「設立準備会」に至る前、日本の児童青少年演劇の国際交流の歴史を繰ってみる必要性を感じた。

つまり、アシテジ日本センターの設立の79年以前に、日本には落合先生以外の国際交流の足跡があったのか、それをまず調べる必要性を感じたのである。

日本センター設立前に多くの国際交流が

手元にあるのは、㈳日本児童演劇協会編集・発行による『日本の児童青少年演劇の歩み―100年の年表』である（05年発行）。

この本は、一九〇三年（明36）の川上音二郎のお伽芝居から始まり、二〇〇三年までの児童青少年演劇の年表である。

ある程度は知っていたものの79年以前に、かくもたくさんの国際交流があったことを知り、今さらながら驚かされた。

以下、『100年の年表』からの抜粋である。

・66年（昭41）12月　国立チェコ人形劇場ラドスト公演、厚生年金小ホール、1月大ホールのあと全国巡演

・67年（昭42）4月　オーストラリアの人形劇ティントッキー来日公演　東京都児童会館ほか横浜、名古屋、大阪等

・68年（昭43）2月　ソビエト児童演劇祭参加のため、栗原一登、大井数雄、弘子、平松仙吉、横浜港出発

・同年8月～9月　太郎座ソビエト公演「竜の子太郎」「うぐいす姫」他、モスクワ、キエフ、リガ等15日（一行20名）

・69年（昭44）6月～7月　チェコで開催の国際人形劇連盟（ウニマ）創立40周年記念大会に日本代表団16名が参加　団長芳川雅勇（クラルテ）他

・72年（昭47）9月～10月　ウニマ第11回世界大会、国際人形劇フェスティバル（仏、シャルビル・メジェール）に川尻泰司、長谷詔夫ら28名。

・75年（昭50）1月19日～3月20日　荒馬座カナダ公演「日本の太鼓とおどり」

・同年9月　劇団風の子「トランク劇場」ハンブルク（西ドイツ）の国際児童演劇祭出演

・同年9月～　劇団カッパ座第1回アメリカ公演

・76年（昭51）5月　劇団風の子カナダ児童演劇祭に参加「アニメイム」「イソップいそっぷ」（関矢幸雄作演出）

・同年5月～6月　国際人形劇フェスティバル（モスクワ）に、八王子車人形西川古柳座西畑人形芝居、竹田人形座出演　第12回ウニマ（モスクワ）大会に日本から69名参加

・同年8月　人形劇サークルほっぴい（代表清水俊夫）第1回海外巡回子ども会公演、タイ、マレーシア、他

・77年（昭52）5月　劇団飛行船　ソ連政府招聘公演「ピノキオ」　レニングラードほか5都市　50日間

・同年7月～8月　ルーマニア国立プロエシュティ劇場公演「パカラの冒険」　全国42会場　全国子ども劇場・おやこ劇場連絡会主催

・78年（昭53）5月～6月　劇団風の子カナダ公演「トランク劇場」（関矢幸雄構成演出）

と、ここまできて、いよいよ同年のマドリード大会へとつづくわけである。

香川良成氏は『アシテジ』の前号（No.100）で、「今にして思えば、78年6月のスペインの首都マドリードでの第6回世界大会へ、落合氏を団長として多数参加したのが、日本センター設立の引き金になったようである」と述べる。たしかに、直接の引き金はそうであろうが、日本センター設立までに、前述のように、日本国内に国際交流の〝土壌〟が形成されていたと考える。

ひとつは、劇団風の子の3回に及ぶ海外公演、そして、全国子ども劇場・おやこ劇場連絡会主催によるルーマニア『パカラの冒険』の全国公演、この二つの影響が特に大きいと思われる。

「協会」の国際交流

一方、前号で書いた「アシテジ日本センター設立準備会」の動きはどうか。これもまた、その前史を辿る必要がある。

㈳日本児童演劇協会（以後、協会）の機関紙『児童演劇』（毎月発行）から、ひもといてみる。

『児童演劇』の75年（昭50）の6月号（No.157）に、突然（それまでなかった）〝国際交流〟が現れる。この号は、協会の昭和50年度の「事業計画」を発表したもので、「9、海外（国際）交流事業への協力と推進◎時岡・落合・三好・しかた」とある。もっとも、協会の定款の〈事業〉の項目の中に、「四、児童演劇の国際交流」が謳われており、出てきても不思議はないのだが、何故〝突然〟出てきたのか。

ひとつは、昭和54年度の〝国際児童年〟への対応（他団体もすでに動き出していた）、二つ目には、落合先生の国際交流の活発化（当時から先生には、各国から日本の劇団の招聘等の話がきていた）し、いろんな話が協会にも持ち込まれていたこと、などがある。とはいうものの、その年度に委員会等が開催された形成がない。

昭和51年度の事業計画にも、「海外（国際）交流事業の推進」とあり、総会報告の中に「とくに、『海外交流事業』に関してASSITEJと少年演劇センターなどと、協会がどのような関係をもっていくべきか、質疑や意見が出された」とあるから、論議がたくさん交わされたものと思われる（私には覚えがないが、おそらく多田徹・しかたしん・冨田博之さんあたりから提議があったものと推測する）。

紙面が尽きた。もう少し〝前史〟について書かせていただく。

韓国との交流の思い出
―「アシテジ」二〇〇号によせて―

石川明（野ばら）

アシテジ日本センターの設立にたずさわって以来、早くも三十年の月日が経ったのですね。

アシテジ機関紙百号に寄せて何か原稿を書いてほしいとの依頼があり、何を書いていいやら、いろんな出来事が浮かんでは消え、消えては浮かぶ…さて、どうしたもんやら…

一九八五年夏、佐渡祭典の実行委員のメンバーであったボクは、佐渡汽船のデッキにいた。

ふと先を見ると、韓国の金雨玉、尹大星の両氏がたたずんでおられる。ボクは缶ビールを三本買って両氏に近づき「こんにちは」とビールをさしだした。

お二人は快くそれを受け取りカンパイをした…

片言の日本語と片言の英語で次第に打ち解けていった。

そんなこともあってか、それ以降、ボクは韓国によく行って交流を深めていった。

ある日の事、地下鉄明洞駅の近くで、おばあさんに呼び止められた。何かを尋ね、何かを訴えているのだが、ボクはハングル語はチンプンカンプンで、答えようがなく、手をかざして、ゴメンと心でつぶやき、その場をそそくさと立ち去ったが、その時のおばあさんの悲しげな顔は今でも忘れることはない。

その日以来、ボクはハングル語を独学し、日常会話を少しは話せるようになっていった。

一九八九年五月、韓国公演！韓国では、四年前から毎年五月いっぱい、児童青少年のための〝アートステージフェスティバル〟が開催されていますが、その期間中に日本からはじめて、アシテジ韓国の招聘で劇団野ばらが参加することになったのです。

作品は「サルと少年」（作・演出／石川明）五月四日～九日までソウル（於現代アートホール）

当時の韓国では、日本の文化（映画、音楽、演劇等）は、まだまだ解禁されておらず、そんな中にあって、弱小劇団の野ばらが積極的に韓国公演を望み、実現できたことは、今にして思えば、どえらいことをしたんだなあと胸を撫で下ろしている。

公演終了後、夕食会が盛大に開かれました。

たびたび来日しておられる会長の金雨玉氏、作家の尹大星氏をはじめ、韓国アシテジでご活躍の演出家、俳優、評論家の理事の方々、アートホールの劇場関係の皆さん、金先生率いる東朗青少年劇団の若い俳優の皆さんたちに囲まれての楽しいひとときは、最高の思い出です。

隣国とのつながりを さらに強く

林陽一（風の子九州）

「鹿児島県子ども芸術祭典」が今年で二十周年を迎え、それを記念し三月二一日から二三日まで、鹿児島市内の五会場で、二七演目の作品が上演された。参加作品の一つ、韓国ソウルの劇団「サダリ」の、『時計が止まったある日』の出演者たちと舞台装置は、釜山港を前夜出港し、翌朝博多港に到着した。博多駅から、JR鹿児島本線リレーつばめ・九州新幹線つばめを乗り継いで、鹿児島中央駅へ向ったが、車内放送の日英韓中の四カ国語を聞いて、さぞ驚いたことだろう。

『時計が止まったある日』は仮面を使った無言劇で、戦争の悲惨さや人々がどのように、権力から圧迫されるかを、見事に抉り出し、観客特に中学生・高校生に深い感銘を与えた。今秋鹿児島県内で、一カ月の巡演が予定されている。

また、三月二七日から三十日、福岡県朝倉市での「杷木国際子ども芸術フェスティバル」には、ソウルの人形劇団「美しい世」の『エギトンプル』と、済州島の劇団「ジャパリ」の『おばあちゃんの古い倉庫』が、公演参加した。

六月一日からは、北九州門司港・釜山港間に新しいフェリーが就航する。二〇一一年には九州新幹線が博多・鹿児島を結び、韓国でもソウル・釜山間に新幹線がつながり、九州と韓国との往来はさらに便利になり、文化芸術交流も活発になることが予想される。児童青少年演劇の分野でも両国の関係は、より密接なものになるだろう。

一九八四年五月の第一回韓国子ども芸術祭典で、劇団風の子が国立劇場小劇場で『トランク劇場』を上演し、韓国児童青少年関係者を驚かせた時代、また一九九六年七月のソウル児童演劇フェスティバルで、風の子九州が『にっこりぽっかり座』を、ハクチョン青劇場とソウルアーツセンター・チャユ劇場で上演し、子どもたちや母親だけでなく、若い劇団や演劇学部の学生に、大いに受け入れられた時代に比べ、現在の韓国の児童青少年演劇の作品の質は、格段に向上している。二十年以上前から韓国アシテジの、金義卿先生や金雨玉先生が、何度も突然福岡に来られ、慌てたことも今では懐しい思い出となった。

私たちの劇団の韓国公演が毎年定例化したように、韓国の劇団の九州公演も日常化していき、子ども劇場や劇団道化さんと一緒に九州各地で、日本・韓国・（中国）の児童青少年演劇フェスティバルが繰り広げられることも、決して夢でなく、現